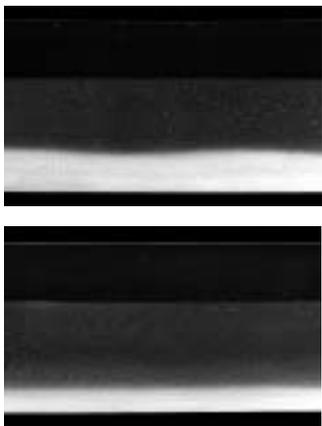
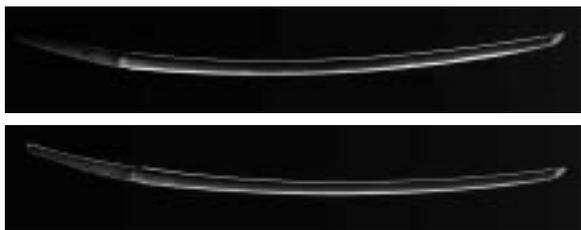


刀を愛でる

刀を評する際に、板目・杢目・柾目など、樹の木目に喩えることがあります。これは刀の肌の美しさを表現するための言葉です。

鉄は折り返して鍛錬されることで、よりいっそう強靱さを増します。刀工は

鋼を半分に折っては打ち伸ばし、折っては打ち伸ばしと何度も繰り返します。こうして薄い鉄の層を数多く重ねると、弾性に富んだ強固な鉄が作られます。この折り返し鍛錬は日本刀の構造に欠かせません。その後焼入れをして、丁寧に研ぎ上げると、樹の木目のような模様をもつ鍛肌が生まれます。



▲全体図
上：重文「太刀 銘国宗（伯耆）」
下：重文「太刀 銘国宗（備前2代）」

▶拡大図
上：国宗（伯耆）の地鉄
下：国宗（備前2代）の地鉄

高度な技術を要する鍛肌は、世界でも他に例を見ない、日本刀の大きな特長の一つです。個々の刀身がじっくり観察すると多種多様な模様が浮かびあがって見えます。これが、各流派の特徴や刀工の個性までもを表すのです。肌模

様に注目して鑑賞すると、一見無愛想な刀剣の、隠された豊かな魅力に触れることができます。

刀は武器として使われる一方で、その美しさが讃えられてきました。中世末には鑑賞法も確立しています。以来、刀は美術品として人々に愛でられ続けています。中でも鎌倉時代の刀は、その姿の優美さや、刃文・肌模様（地鉄）の味わい、そして歴史の重みから、特に好まれました。この時代に名刀も多く生まれていました。当館が所蔵する重要文化財の刀剣2口も鎌倉時代に作られたものです。

「太刀 銘国宗（伯耆）」（写真上）と「太刀 銘国宗（備前2代）」（写真下）。奇しくも刀工銘（名前）を同じくしますが、国を違える別人です。作刀期も伯耆国宗が少し早いと言われています。

拡大写真の方は、それぞれの太刀の地鉄の様子をお伝えしようと、当館学芸員がデジタルカメラで撮影したものです。少し分りにくいかも知れませんが、備前の約んだ（引き締まった）地鉄に比べると、伯耆は黒みがかった幾分荒く、肌目がくつきりしています。中国山地を間にはさむ伯耆（鳥取県西部）と備前（岡山県南東部）では、採れる鉄がまったく

同質であるとはいえません。心して鍛錬方法も変わってきます。結果、地鉄もこのように異なる様相を見せるのです。

しかし、鍛肌の実像を写真に留めるのは、微妙な光の加減が求められるために、至難の技です。従来はブロに頼らざるを得ませんでした。現在は機器類の目覚ましい向上に助けられ、試行錯誤しつつも学芸員が撮影できるようになりました。また、刀身自体をそのままスキャナーで読み込むという試みも行われているようです。それでも、まだどれも実見には及びません。現時点では、鍛えの美しさを愛でるには、直接見るのが一番だといえます。

二つの太刀が同時に展示されるこの機会に、是非それぞれの刀身をじっくり鑑賞してみてください。

（彦根城博物館 学芸員 坪内広子）

重文「太刀 銘国宗（伯耆）」と重文「太刀 銘国宗（備前2代）」はテーマ展「井伊家伝来の刀剣―鎌倉時代の作品から―」（12月22日（水）まで・期間中無休）で展示します。